

2026年2月22日 受難節 第1主日礼拝メッセージ

「新しく生きる」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 2章 18-22節

「新しいぶどう酒は、新しい革袋へ」という諺は、聖書を読んだことのある人なら、聞いたことがあるかもしれません。「中身が変わったら、外側も変えないといけない。そうしないと両方駄目になってしまう」という意味で、「組織のリーダーやメンバーが変わったら、制度や仕組みも変えるべきだ」というような意味でも用いられるのではないかと思います。

この諺は今回の「マルコによる福音書」だけではなく、他にも「マタイによる福音書」(9:14-17)、「ルカによる福音書」(5:33-38)にも記されており、いずれも律法を守ることを重視していたファリサイ派の人たちと、イエス様との問答という流れの中で、この諺が述べられています。そのために、キリスト教の教会の中では、「古い服」や「古い革袋」というのは旧来のユダヤ教であり、ファリサイ派の人々が重視していた律法主義のことを表わしている。一方、「花婿」や「新しい布」、「新しいぶどう酒」とはイエス・キリストのことであり、新しく来られたイエス様によって、「古い革袋であるユダヤ教は一新され、新しい革袋であるキリスト教こそが、本当の救いをもたらす福音なのだ」というように、理解されて来た、解釈して来ているように思います。

しかし、本当にそうなのでしょうか。改めて考えてみますと、疑問が残ります。なぜなら、イエス様はユダヤ教徒でユダヤ人でしたし、「キリスト教」というものも、イエス様の弟子たちが後々に作ったものですから、イエス様自身はキリスト教徒ではありませんでした。そのようなイエス様が「ユダヤ教よりもキリスト教の方が優れている」というようなことを語ったというのは、おかしいことです。ですから、そのような解釈は歴史の中を生きられたイエス様の言葉というよりも、聖書を記してまとめた後世の人々の理解であったと考える方が自然です。

そもそも、今から2000年も前の、紀元1世紀頃の人々の生活において、「新しい布」織りたてで、まだ晒していない布地を、「古い服」に継ぎ当てのために縫い付けることなどあったのでしょうか。また「古い革袋」に、まだまだアルコール発酵

途中の「新しいぶどう酒」を入れることがあったのか、と考えると、そのようなことも恐らく無かったでしょう。そのようなことをすれば両方とも駄目になってしまうのが目に見えているからです。機織りはとても手間のかかる大変な作業でしたから、布も服もとても高価で貴重なものでした。そのため庶民は服を何枚も何着も持っていたということはなかったでしょう。またぶどう酒も、革袋というのは飽くまでも携行用の水筒であって、ぶどうの実を収穫して、搾り場で搾って、そのぶどうジュースを保存し、発酵させ熟成させるのは、甕や壺、樽でした。ですから、これらの諺は誰もが知っている「非常識な行動」を表わす諺だったのではないかと考えられます。

とはいえ、もしかすると、通常ではあり得ないことながらも、貧しさのあまり、今身に着けている服の破れに、何とかして手に入れた「新しい布」を当てざるを得なかったり、今手元にある唯一の容器である「古い革袋」に、「新しいぶどう酒」を注がざるを得なかったりするような、苦しい生活を送っていた人々が、イエス様の周りにはおられ、イエス様がそのような方々のことを、思い浮かべての言葉だったのかもしれない。

いずれにせよ、今回のお話でイエス様が人々に伝えられたことは、後半の「そんな非常識なことはしなさんなよ」ということではなく、前半の「今こそが婚礼の祝宴、パーティーの最中だよ」ということだったのだらうと思います。18節には「(洗礼者)ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は断食していた」とありますが、一方でイエス様たちは断食をしていませんでした。断食は「ヘブライ語聖書」の律法にも定められている伝統的な宗教的实践でしたから、ファリサイ派の人々はしばしば行っていたようです(参照:ルカ 18:9-18)。しかし、イエス様は「今は花婿との結婚式、婚礼の祝宴の最中だから、断食は必要ではない」と言われました。そして「結婚式」や「婚礼」からはイメージとして、「ご馳走」や「よい服装」「よいお酒」などが連想されますから、そこから後半の21節以降の諺へとつながっていったのだと考えられます。

イエス様は、当時の宗教指導者たちが実践し、また指導していた「形ばかりの断食や律法順守」に対して、明確に否を唱えました。本当の断食とは他人に見せる物でもなく(マタイ 6:16-18)、自慢するものでもない(ルカ 18:9-18)と言われたわけです。なぜなら、普段から十分に食べられている人や、お金を持っていて

有り余っている人は、断食したり献金したりしても、とくに何も困りませんが、今日の食事すらろくに食べられていない人が断食したり、お金を持っていない人が持っている限りを献金したりしたら(マルコ 12:41-44)、たちまち生きていけなくなってしまうからです。

今回の「招きの詞」でも読みましたが、「ヘブライ語聖書」の「イザヤ書」58章には、「あなた方は断食の日に、働く者を虐げている」(3)、「葦のようにその頭を垂れ／粗布を敷き、灰をまくことが、断食なの(ではない)」(5)、「神が選ぶ断食とは／不正の束縛をほどき、軛の横木の縄を解いて、虐げられた人を自由の身にし／軛の横木をことごとく折ること。飢えた人にパンを分け与え／家がなく苦しむ人々を家に招くこと、裸の人を見れば服を着せ／自分の肉親を助けること」(6-7)、それこそが、本当の断食だと記されています。そして、歴史の中を歩まれたイエス様の歩みも、まさにその通りでした。花婿であるイエス様が今共におられる。だから、不正の束縛、支配から共に解放され、家に入り、服を着て、食事をしよう。婚礼の祝宴に入ろう。今がその時なのだから……。イエス様がその言葉と生き様を通して、人々に伝えたこと、証したことは、まさにそのことだったのだらうと思います。

話は変わりますが、先日、中学や高校で「なぜ勉強するのか」「何のために勉強するのか」、その理由についての話を聞きました。学校の先生から説明されるのは、「将来困らないため」という理由なのだそうです。確かに、うちの娘も「将来の職業選択や、生き方の選択肢が少なくなならないように、勉強するようにと言われた」と言っていました。ですが、そこにあるのは「もしも今、勉強しなかったら、将来困ったことになるぞ」という脅迫、脅しであって、知的好奇心に基づく本来の「勉強の楽しさ」とは対極にあるものです。そのように考えると何だか悲しくなってきましたし、「テストのために勉強しないといけない」というだけでは、ますます勉強が嫌いになって当然だと思いました。また一方では、それとは反対に、「それこそずっと、いわゆる偏差値の高い学校に行って、周りの同級生たちも皆、同じように偏差値の高い人たちばかりだと、それ以外の人たちや生き方があるということに接する機会がないので、却って生き方や職業選択の幅が狭くなってしまふ、いわゆるエリートコースから一歩外れたら即、真っ暗闇の奈落の底のように理解されている」という

話も聞いて、「なるほど、そういうことも確かにあるのだろうか」と考えさせられました。

「将来、地獄ではなく、天国に行けるように、今はしっかり律法を守って、ちゃんと断食したり、献金したりしなさい」というのは、今も昔も色々な宗教ではよく聞かれる言葉ではないかと思います。しかし、それらはやはり脅迫であり、呪いの言葉です。そこに解放はなく、救いは単に未来に先送りされているだけです。そしてそれは、イエス様が地上を歩まれた紀元 1 世紀も、現代も同じではないでしょうか。しかし、イエス様はそのような現実世界の中で、今ここにある救い、解放として、「私（花婿）は今、他でもないあなたたちと一緒にいる」という「福音」、良い知らせを告げられました。「たとえ生活が苦しくて貧しくても、お互いに持っている物を分かち合って、支え合っていく中に、神様が共におられて確かに働かれているということが実感される。そこにこそ救いがあり、解放があり、神の国が実現しているじゃないか。そのことに目を開いて気付いていこう」ということなのだろうと思います。

新しいぶどう酒を新しい革袋の中へ入れるということ、古い自分を脱ぎ捨てて「新しく生きる」、新しい生き方へと変えられていくのは、「いつかやって来る未来」ではなく、「今ここ」から、今を大切に生きるところから始まるのだと思います。詩人の坂村真民さんの言うように「大切なのは、一呼吸、一呼吸の今である」ということでしょう。

この後、賛美歌「イエスに結ばれて」を歌います。自分一人だけの力では、何もできなかったとしても、いつも共にいてくださるイエス様と一緒にだからこそ、仲間たちと共にお互いに大切にし合う心を持つことができる、この地に神様の御心がなりますようにと祈り、歩み出すことができる……。そのことに信頼して、私たちは、先日から始まった今年のレントの期間を、過ごして参ります。